W・ディルタイにおける「方法」の問題 序説（一）

森本　司

序

W・ディルタイの哲学・思想影響史を振り返ると、奇妙な様相が現われる。たびかさなる批判的受容を経て、ディルタイの思想はいくたびものり超えられている。のり超えられるたびに、また以前とは異なる顔が現れる。もちろん、幾度も批判され、検討されて今日に至る思想家・哲学者は数多くいるだろう。批判され検討されるたびにその内容は、異なっているだろう。しかし、ディルタイの場合は、事情が少々入り組んでいる。二十世紀に現われた数多くの思想家の先駆者として、ディルタイは評価され批判される。彼の思想は常に先見性のみで評価され、常に時代の制約と徹底性の欠如が指摘される。この批判のもとでは、ディルタイの思想は一部新しく、そしてほとんどが古い。ディルタイ哲学の批判者からすると、ディルタイの思想には、現代哲学を切り開く斬新な面がある点で新しく（先見性があり）、前時代の制約を無反省に引きずっている点で、古いのである。そして、その斬新さが認められる分野は、表面的には統一されているように見えず、各思想の連関の絆は切れやすい（あるいは、各思想の連関の絆は見分けがたい）。そこで、その批判者によって、彼の哲学思想内容に関し規模の小さな先見性が評価され、同時に前時代の残滓の多さと前時代の思想の無批判的受容とが激しく批判される。

初期のディルタイ哲学批判のうち影響史上で重要な批判は、十九世紀末期にエビングハウスにより心理学の領域で行われた。その際批判された論文は、ディルタイの心理学に関連している（Cf., Ideen über die beschreibende und zergliedernde Psychologie, 1894. 「記述的分析的心理学に関する諸構想」。以後「諸構想」論文と記す。）当時ディルタイは精神諸科学を成立させるための基礎学として、ディルタイの言う意味で

の心理学を想定していた。ところが、エビングハウスが一八九六年に発表したディルタイの心理学を批判する論文によって、ディルタイはこの以前の友人と学会で同席することさえ嫌うような仲になった。ディルタイの心理学は時代遅れと規定され、ディルタイは徹底的に痛めつけられた。続いてE・フッサールの『厳密な学としての現象学』(Philosophie als strenge Wissenschaft, 1911) により歴史主義者としてのディルタイが、暗に批判された。フッサールは後に弁明をしているが、[1] やはりこの指摘はディルタイに向けられていると考えざるをえない。さらに、周知のごとくM・ハイデッガーの『存在と時間』(Sein und Zeit, 1927) により人間存在論の哲学者としてのディルタイが取り上げられ、ディルタイの先見性や根本的な重要性が明示されつつも、ヨルク伯の思想にそってのり超えられるべきであることが指摘された。最近では、H・G・ガダマーの『真理と方法』(Wahrheit und Methode, 1960) により解釈学の哲学の先駆者としてディルタイ哲学が考察される一方、科学主義者、ヘーゲル主義者、そしてデカルト主義者として批判され、のり超えられる対象となった。また、他の思想家達[2]により、ディルタイ哲学は、のり超えられ克服されたものと見なされている。このような経過のうちで興味深いことは、それぞれの批判的受容の時期にディルタイが別の形で復活し批判されているという点である。確かに、ディルタイの研究領域は広く、それぞれの分野で批判され検討されるべきであるが、しかし各分野が独自に復活し、十九・二十世紀の著名な学者によって論考の対象とされたということは、ディルタイの思想の各分野の関連が見失われているということを示している。

さまざまな顔をもつディルタイ。他面性のディルタイ。このことは、ディルタイの哲学・思想を研究する者には明白なことであり、ディルタイの思想の受容史もまたそれを示している。[3] しかし、ディルタイ研究家達には、この他面性こそが問題であった。ディルタイ哲学に関する現代の代表的な研究者であるローディはその著『形態学と解釈学』(Morphologie und Hermeneutik, 1969) のなかで、形態学と解釈学の基本的性格が本質的に異なっているにもかかわらず、ディルタイの思想の中ではそれらの異質な性格が混在しているという点を指摘している。

「従って、このようにディルタイの美学は注目すべき緊張領域の内にある。この緊張領域は、すべてが平均化されずに、部分的には後期の著作においてもなお関連づけられることなく並存している、種々の傾向によって形成されている。」(傍線の強調は引用者による。以下同様。[1])

ディルタイの著作における根本的性格の混在は著作そのものの理解を困難にする原因となっていると同時に、それがディルタイ哲学の性格をも特徴づけている。このことは本来強調されてしかるべきであったにもかかわらず、不思議なことにあまり議論の対象とされていない。また、その他面性は彼の思想の分野ごとに現れるだけではなく、議論の至るところにも現れている、という事態がディルタイの思想の理解をいっそう困難にしている。このことに関して、すでにディルタイ哲学の後継者が、例えば、G・ミッシュが、H・ノールが、O・F・ボルノーが、F・ローディが、H・—U・レッシングが同様の困難さについて触れている。ディルタイが研究中に抱いていた事柄はその仲間達にさえ知られていなかったというたことを、ミッシュが指摘し、さらにディルタイを「謎の老人」と呼んだことは有名である。[5] また、現代の代表的なディルタイ研究家であるO・F・ボルノーは、次のように述べている。

「ディルタイはそもそも簡明な叙述をする人間ではなかった。彼はものごとをつねにその錯綜した全体の中で見ており、はっきりとした最終的定義づけをおそれて問題を最後まで未決着のままに残しておいたのである。何度も書き直された未完成の草稿が、発表されないまま書類戸棚の中に積み上げられていったのはこのためであった」。[6]

「しかし、（概して）ディルタイの著作のすべてが完結しつつある今日でも、ディルタイを簡潔に理解することに関しては、数々の困難がまだ相変わらず残っている。この困難さは、以前に成立したイメージが、今日公正な受容を妨げている点ばかりにではなく、同時により深い意味で、彼の叙述の固有性にも根ざしているのである。若いころにすでに現われていた、彼の『たとえ優れているにしても早まった、一面的な定式化に対する嫌悪感』と、[7] 対象がもつれあう中で対象の生命を追求する彼の分析技術とが前提になって、数々の問題設定相互の錯綜した絡み合いが生じ、また、一面的なあらゆる誇張を警戒し、便利な定式や印象深いスローガンの利用に著しく対立する、特有の慎み深い表現が、生まれ出ている。[8]」

ディルタイ哲学の研究家達はこの事態が単なる偶然ではないことに気づいてはいたが、しかし依然として、そのこと自身が論考のテーマとはな

っていない。このディルタイ哲学の理解困難性の理由として、体系性の欠如、理論の未完結性、理論細部の徹底した分析の欠如等が挙げられるが、はたしてそれだけであろうか。ミッシュやボルノー達の小声の告白は、杞憂に過ぎないのであろうか。このようなディルタイの論述態度そのものに彼固有の問題（方法論）が関連していないだろうか。この問題を解く鍵の一つは、『精神諸科学序説』の序文に見られる。その序文の中で、ディルタイは「歴史学派」を批判して、認識論的立場を固執した。この序文の中には、重大な発言がいくつか見られるが、ここではこの序文に注意を向けるだけにしておこう。

後にヨルク伯による批判、エビングハウスによる批判を通して、ディルタイは、表面的には徐々に認識論・心理学から遠ざかった。ガダマーによれば（これは、もちろんハイデッガーの立場が基本にあるわけだが）、この認識論的立場が方法概念と結びつき、ディルタイ哲学本来の姿を歪めているということになる。従って、十九世紀のディルタイは心理学に固執しているので、いまだ近代の亡霊に取りつかれているのである。ハイデッガーやガダマーらの思想に結びつく、ディルタイ哲学の本来の姿は、二十世紀に入ってから、つまり晩年のディルタイの思想に現われていることになる。もちろん、このようなハイデッガーやガダマーを中心とした理解に対し、初期からの基本思想の一貫性を主張する研究家がいないわけではない。しかし、晩年のディルタイの思想の重要性も無視できない。ローディやレッシングらの研究活動もこの点を踏まえて、しかもガダマーの見落としていた問題点を指摘し続けている。

今世紀に入り、ディルタイ哲学の影響史（作用連関史）において重大な衝撃を与えた思想家は、ハイデッガーとガダマーである。その中でも、現代のディルタイ哲学の研究家達が批判の念頭においている思想家は、ガダマーである。[9] ローディやレッシングらの批判活動もガダマーを対象としている。しかし、そのガダマーもディルタイ批判の基底部分をハイデッガーの『存在と時間』のディルタイ批判に負っている。従って、ガダマーのディルタイ批判を、ハイデッガーの考察とは切り離して単独で分析・論究することはできない。ハイデッガーの有名なディルタイ批判を分析し、そこに潜む問題点をあらわにした後で、ガダマーのディルタイ批判を扱わなければならない。

従って、以上の簡略な記述に従い、本論考はディルタイの思想を、再度別の角度、すなわち研究態度とその態度における術語の使用法、ものの見方を規定する視点とその視点に基づく内容との関連という角度から検討する。そして、ディルタイの「方法」の問題にハイデッガーとガダマーの批判をとおして徐々に輪郭を与えていく。その際、ディルタイ哲学の受容史を鑑みて、その影響力の大きい二人のディルタイ批判のうち、

まずハイデッガーを取り上げ、その批判内容を分析した後で、ガダマーのディルタイ批判を問題としたい。そして、その分析を通じて、二人の批判者達が見落としていた重大な問題点を指摘したい。もし、この指摘が可能となれば、ディルタイに対する今までの見方も一部検討・変更しなければならなくなるだろう。

1　ハイデッガーの『存在と時間』におけるディルタイ像

ハイデッガーは、『存在と時間』において独自のディルタイ像を打ち出した。ハイデッガーによるディルタイ像は、当時流布していた歴史記述家としての面ではなく、むしろ生の哲学の理論家としての面が強調されている。『体験と創作』(Erfahrung und Dichtung, 1905) 等の著作によって知られていた精神史・文学史の解釈者・記述者というディルタイ像（附随的に、心理学を問題にし、挫折した精神科学者というイメージを帯びる）を、ハイデッガーは「実体」を促えそこなうものと考え、むしろディルタイにとって本質的な点は、「『生』をその歴史的な発展連関及び作用連関において、つまり『生』を、人間が存在する仕方として、精神諸科学の可能的対象であると同時に精神諸科学の根底として了解」[10]するところにあるとする。そして、さらにディルタイにおける生の哲学者としての根本的な傾向を、ハイデッガーは次のように分類している。

「精神諸科学の理論及び精神諸科学と自然諸科学の区分の理論のための諸研究。人間、社会及び国家の諸学の歴史に関する諸探究。『人間という全体的事実』を叙述すべき心理学をめぐる諸努力。」[11] (S. u. Z., S. 398)

これらの諸傾向は相互に浸透しあい、交差して、どれか一つが前面に出ている場合でも他の二つの傾向が、動機となり手段となっている、ということが指摘されている。これら三つの傾向の目標は、「『生』を哲学的な了解内容へともたらし、『生自身』のうちからのこうした了解に一つの解釈学的基礎を確保すること」(a. a. O., S. 398) であると示されている。

ハイデッガーは、体系家・理論家としてディルタイを甦らせ、自らが克服すべき課題を追究した先人として評価した。その際、『存在と時間』

においても、なお課題として生きているディルタイの思想内容を、彼は、まず、「生」の存在論をめざす哲学として規定した。ディルタイ哲学を把握し、解釈するハイデガーの根本的な視点は、まさにここにある。ディルタイの著した哲学理論に関する論文は、みな分析が中断され、その徹底性を欠いているが、その本来の傾向が発展され、詳論されれば、ハイデッガーの思想に近づく可能性を秘めていると考えられている。いわば、磨かれる前の宝石なのである。例えば、現存在を死へと関わる存在として規定するハイデッガーは、ディルタイ哲学に対するこのような根本的視点から、次のような注解を与えている。

「その本来の哲学的傾向が生の存在論を目指していたディルタイは、生と死との連関を見誤るということはありえなかった。『そして最後に我々の存在感を、最も深く、また最も普遍的に規定している関係、それは生の死に対する関係である。なぜなら、死による我々の実存の限界づけこそ、生に対する我々の了解と評価にとりつねに決定的なことだからである。』」(a. a. O., S. 249)

ディルタイの思想には、『存在と時間』におけるハイデッガーの指摘通り、人間存在論的側面が多々認められる。ディルタイ自身は、『精神諸科学序説』の序文において自らの立場を「認識論的立場」として示し、歴史学派に欠けていた理論的基礎づけの試みを追究したが、晩年の著作『精神諸科学における歴史的世界の構成』(以後、『歴史的世界の構成』と記す。)における「了解」論には明らかに人間存在論的側面が認められる。また、「生の客観態」における人間と社会との関係も、「構造」論を基礎にしながら、きわめて強く人間存在論的傾向が見られ、『存在と時間』におけるハイデッガーにとって、つまり、「現存在の存在」を通して「存在」を追究するハイデッガーにとって、まさにディルタイは、生の存在論へ到る途上の思想家として考えられたに相違ない。だからこそ、彼は、次のような当時としては過大な評価をディルタイに与えたのである。

「歴史の問題が根源的な地盤となればなるほど使用可能な『カテゴリー的』手段の貧困さと一時的な存在論的地平の不確かさと言うものがますます切迫したものとなっている。以下の考察は、歴史性に関する問題の存在論的な場を告示するということで満足する。根本的には、以下

の分析にとり重要なことはただ次のことだけである。すなわち、それは、今日の世代においてもなおディルタイの研究を一部早急に我がものとするという事態である。」(a. a. O., S. 377. なお傍点は原著者によるゲシュペルトによる強調を示す。以下同様。)

ハイデッガーがこのような評価に至るのも、まさに、ハイデッガーがディルタイの思想内容を根本的には「生の存在論」として把握し、ディルタイ哲学における他の認識論的傾向を派生的なものとして、あるいは、近代哲学の残滓として規定しているからに他ならない。従って、ハイデッガーは、ディルタイにおける研究範囲としては、先に示した三分野の絡み合いとして叙述し、ディルタイの研究の仕方にまで言及している一方で、ディルタイ本来の傾向を「了解を中心とした、生の存在論」とする図式で規定する。このことから、ハイデッガーはディルタイにおける学問論の方向を中心的なものではないとしている。

「ディルタイにとって、彼の『心理学』が『単に』心的なものに関する実証科学の修正として求められたものではないと同様、『精神諸科学の論理学』は中心的なものではない。」(a. a. O., S. 398)

さらに、ハイデッガーはディルタイの二つの主要な理論的論文である「外界の実在性についての我々の信念の起源とその正当性との問題解決のための寄与」(Beitrage zur Lösung der Frage vom Ursprung unseres Glaubens an die Realitat der Außenwelt und se inem Recht, 1890. 以下、「実在性」論文と記す。)と「諸構想」論文を、先の図式に基づいて、つまり、「了解を中心とした、生の存在論」という図式によって把握している。この立場から、彼は「諸構想」論文について、次のように記している。

「ディルタイの諸研究は不断に生を問いつめる。彼は、こうした『生』の『諸体験』を、諸体験の構造連関と発展連関に従って生自身の全体から了解しようとする。彼の『精神科学的心理学』の持つ哲学的な重要性は、それが心的な要素や原子に定位して心的生をつなぎ合わせようとしたりせずむしろ『生の全体』や『諸形態』を目指していたという点にあるのではなく、そうした事態にもかかわらず彼は全てに先立って

『生』を問うことのただ中にいたということ、このことである。」(a. a. O., S. 46)

そして、上の二つの論文は、総括的に次のように述べられている。

「実在的なものは衝動や意志において経験される。実在性は抵抗、より精確には、抵抗性である。この抵抗現象を分析的に完成させたいということが上述の論文（「実在性」論文の引用者註）の積極的な点であり、『記述的分析的心理学』という理念を最善に具体的に確証している。」(a. a. O., S. 209)

もちろん、ハイデッガーはディルタイを肯定的にのみ捉えていたわけではない。ハイデッガーにとって、ディルタイの『生の存在論』は不徹底であって、あまりに未完成的であり過ぎた。その存在論に内在する傾向は、本来的なものとして評価されたが、しかし、それにもかかわらず、ハイデッガーには許し難い不徹底がディルタイのうちに残されていた。『存在と時間』の第七七節「歴史性の問題の前述の開陳と、W・ディルタイの諸研究およびヨルク伯の諸理念との連関」で、ハイデッガーが論述している内容は、まさに、この点に関与している。

その第七十七節では、まず初めに当時のディルタイ像とそのハイデッガーによる修正が述べられ、表面に現れているディルタイの研究分野について略述され、ディルタイの生の哲学に対する一応の評価が記された後で、ヨルク伯の引用を頼りに、ディルタイ像の再提示を試みている。ここで、ハイデッガーはディルタイの思想内容における不徹底さをヨルク伯の思想により修正し、ディルタイの本来的な傾向をはっきりと打ち出そうとしている。

「ヨルク伯はかつて、ヨルク伯との交際のうちに現れたディルタイの最も固有な哲学的傾向をはっきりと表現して、『歴史性という我々に共通した関心を理解すること』と述べている。」(a. a. O., S. 398)

この箇所から、ヨルク伯の引用が始まり、ヨルク伯によるディルタイ批判が分析される。ハイデッガーは、ヨルク伯によるディルタイ批判の中心を次のように述べている。

「こうしたヨルクの要求は、根本的には諸学に先行し諸学を導くプラント的アリストテレス的論理学の要求であって、この要求のうちに、自然である存在者と歴史である存在者すなわち（現存在）の種々のカテゴリー的構造を決定的に、積極的かつ徹底的に完成させるという課題がある。ディルタイの探究は、『存在的なものと歴史的なものとの間の種属上の区別をあまりに強調しなさ過ぎる』、とヨルクは考えていた。』a. a. O., S. 399)

ヨルク伯によれば、伝統的な歴史研究が物的なものや形態、つまり「存在的なもの」を扱うのに対して、ディルタイの歴史の概念は徹底的に内面的であって、諸力の連結や統一というものだから、ディルタイの用語使用が不適切である、ということになる。この後の長いヨルク伯の手紙の引用も、主としてこの視点に立って行われている。このようなヨルク伯の指摘を、ハイデッガーは次のように分析する。

「人間の現存在そのものの存在性格の認識から、ヨルクは『潜在的可能性』としての歴史の根本性格に関する洞察を得ている。」(a. a. O., S. 401)

「ヨルク伯自身存在的なもの（視覚的なもの）に対して、歴史的なものをカテゴリー的に把握し、『生』を適切な学的了解へ高めようとしたことは、そうした探究の困難性に言及している点から明らでかある。つまり、美的機械論的な思考法は『視覚性に大きく由来する言葉の場合には明らかに、直観の背後に遡る分析よりも容易に言語的表現を見出しやすい。…」(o. a. O., S. 402)

以上の分析から、ハイデッガーはディルタイにおける「生の存在論」の傾向に関して、ヨルク伯の引用を手がかりに次のように結論する。

「『存在的なものと歴史的なものとの間の種属上の区別』を強調するという課題は、歴史性を了解しようという関心によって提示される。これにより、『生の哲学』の基本的な目標が確立される。」(a. a. O., S. 403)

「存在的なものと歴史的なものとの差異の問題は、それが存在一般の意味についての問いを基礎的存在論的に解明することによりあらかじめその手がかりが確信されている場合にのみ、研究問題として形作られる。現存在の予備的実存論的分析論が、ディルタイの功績に報いるためにヨルク伯の精神をいかなる意味で継続しようとするか、という事態が明らかになる。」(a. a. O., S. 403f.)

ヨルク伯の引用文によってハイデッガーが強調した点は、「存在的なものと歴史的なものとの種属上の区別」の不徹底であった。この両者の区別は『存在と時間』の根本に関わるから、ハイデッガーがこの点でディルタイを批判するのは当然であろう。しかし、その際、見落されてならないのは、ディルタイの本来的傾向を、「生の存在論」と規定した点である。この規定が、むしろハイデッガーの前提にある。ヨルク伯に基づくハイデッガーの批判では、「存在的なものと歴史的なものとの種属上の区別」ばかりが強調されているが、論理的な関係からすると、ハイデッガーのディルタイ批判の論点では、「生の存在論」という規定あるいは立場が先にある。この規定あるいは立場に基づいて考察が行われたからこそ、ディルタイにおいてその種属上の区別が不徹底であると判断されたのである。しかし、ディルタイが同じ立場にいたかどうか、あるいはハイデッガーの言うように「生の存在論」の途上にいたかどうかに関してはより慎重でなければならない。我々の問題は、まさにこの点に関わるからである。

こうして、ハイデッガーはディルタイを自ら（すなわち、「生の存在論」の哲学者）の先駆者として位置づけた。「生の存在論」の思想家としては、「歴史的なものと存在的なものとの種属上の区別」にしなかった点で、ディルタイは不徹底であったが、人間存在の有限性、歴史性に注目し、人間存在に固有の問題領域を形成した点で評価されるのである。

この評価は注目されるべきである。『存在と時間』が刊行されたのは、一九二七年で、この年にディルタイ全集第七巻が刊行された。従って、

ディルタイの晩年の思想内容として、その重要性が指摘されている『歴史的世界の構成』（および、その続編の草稿）が含まれている第七巻を、ハイデッガーが十分利用できなかったことは明らかである。それにもかかわらず、ディルタイ全集第五巻のミッシュによる前文を参考に、ハイデッガーは、ディルタイの思想の本質的な部分に触れている。

以上のハイデッガーのディルタイ批判に関して、はじめに指摘したディルタイ哲学の謎の部分が表されていないが、ハイデッガーがこの点に気づいていなかったわけではない。彼はディルタイの研究活動を指摘したあとで、次のように述べている。

「学問論的探究、学問史的探究及び解釈学的心理学的探究がつねに相互に浸透しあい重なり合っている。一方の視線の方向が優勢である場合でも、すでに他の方向もまた動機となり手段となっている。分裂のように見えたり、不確実で偶然の試みに見えるものも、『生』を哲学的な理解へもたらすこと、そしてこの了解において『生自身』から解釈学的基礎を確保するという目的に至る基本的な動揺なのである。歴史的発展連関及び作用連関のなかで人間が存在する仕方として、精神諸科学の可能的対象として、そして特にこうした諸科学の根幹として『生』を理解する『心理学』を中心にあらゆることが動いている。」(a. a. O., S. 398)

この指摘は、ディルタイの哲学・思想内容のうちに、複雑な視点の混在があり、ディルタイの思考状況が単純なものではなかったことを示している。しかし、ハイデッガーの指摘もこれだけにとどまっている。ローディの見たような相容れない視点の共存と言う指摘はハイデッガーの論述のうちには見られない。また、ハイデッガーの視点に基づくディルタイ像からは、ミッシュが指摘した「謎の老人」ということの意味が分かりえない。問題は、むしろここにある。

このようなハイデッガーのディルタイ像に対しては、すぐにミッシュが『生の哲学と現象学』（一九三〇）で批判を展開しているが、本節は、ハイデッガーが大きな影響力をもってディルタイを理論家として扱った、という点を素描し、ハイデッガーによるディルタイ像に対する批判は、本論文の最終章において再び取り上げ、論述する。この批判は、ディルタイにおける本来的傾向が徹底的に解明された後ではじめて展開されるべきであるからである。

注

(1) Cf. Materialien zur Philosophie Wilhelm Diltheys, hrsg. von F. Rodi u. H. -U. Lessing, Suhrkamp 1984, S. 114.

(2) 例えば、『ディルタイ・ディルタイと生の理念』、ホルヘ著、佐々木孝訳、未来社を参照。また、ッ゛ホルハイム、ディルタイ等の論文を参照。
Cf. Materialien zur Philosophie Wilhelm Diltheys, hrsg. hrtg. von F. Rodi u. H. -U. Lessing, Suhrkamp 1984.

(3) Cf. Wilhelm Dilthey. Texte zur Kritik der historischen Vernunft, hrsg. von H. -U. Lessing, Vandenhoeck/Göttingen 1983, S. 9ff.

(4) Cf. Morphologie und Hermeneutik. Zur Methode von Diltheys Ästhetik, F. Rodi, W. KOHLHAMMER VERLAG/STUTTGART, 1969, S. 47ff

(5) Cf. Vom Lebens- und Gedankenkreis Wilhelm Dilthey, G. Misch, Verlag G. SCHULTE-BULMKE/Frankfurt a. M. 1947, S. 56.
また、H・ハーベが、ディルタイをつかって「神秘に満ちた者」と言っている。
Cf. Wilhelm Dilthey, in: Die Großen Deutschen. Deutsche Biographie, hrsg. von H. Heimpel, Th. Heuss u.B. Reifenberg, Bd. 4, S. 203 f.

(6) 『ディルタイ』、O・F・ボルノー著、麻生建訳、未来社、1977（日本語訳による文）

(7) Cf. Der junge Dilthey, Clara Misch, B. G. Teubner/Leipzig 1933, S. 233.

(8) Cf. Dilthey. Eine Einführung in seine Philosophie, O. F. Bollnow, W. KOHLHAMMER VERLAG/STUTTGART 1936, S. 6.
また、ボルノーは日本で出版された彼の論文集『ディルタイとクリール』の第三論文に「ディルタイ解釈の難しさ」と題する後記をわざわざ書きたして発表している。

(9) 「ディルタイ、ガーダマーと「歴史的」解釈学」、F・ローディ、『思想』二十四頁～三十五頁、岩波書店一九八四年二月、七一六。

(10) Sein und Zeit, M. Heidegger, Max Niemeyer Verlag/Tübingen 1972, S. 398.
以下、S. u. Z. と記す。

Das Problem der Methode bei W. Dilthey.
—Eine Einleitung (I)—

Tsukasa MORIMOTO

Dieser Aufsatz beschäftigt sich mit dem Thema der Selbstbesinnung W. Diltheys über seine Forschungsmethode. Dilthey is nach der Interpretation M. Heideggers sozusagen ein Philosoph vom nur halbfertigen Historismus oder nach der H. -G. Gadamers nur ein Cartesianer. Diese beiden Interpretationen sind aber zu einseitig, weil die Darlegung der philosophischen Diskussion bei Dilthey vielseitige Dimensionen hat und sehr vorsichtig besorgt wird. Trotzdem geben diese Interpretationen den tiefen Einfluß auf die bisherigen nicht wenigen Dilthey-Forscher. So möchten wir zunachst einen kürzeren Umriß dieser beiden Interpretationen geben. Auf dem Grund dieser Darstellung können wir die eigentliche Gestalt der philosophischen Forschungsmethode Dilthey noch objektiv und noch genauer darlegen. Zum ersten Schritt möchten wir den vielseitigen, rätselhaften Charakter der Philosophie Diltheys klar machen ("Vorrede"). Von diesem Gesichtspunkt her können wir die Einseitigkeit der Heideggerschen Kritik gegen die Philosophie Diltheys erklären ("I"). Dies macht den ersten Teil unserer einleitenden Darstellung.